

平成 22 年 6 月 2 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2007 ~ 2009
 課題番号： 19520008
 研究課題名 (和文) 現象学における「理性」概念の変容 フッサールとレヴィナスに即して
 研究課題名 (英文) Transformation of the Concept of “Reason” in Phenomenology:
 Husserl and Levinas
 研究代表者
 田口 茂 (TAGUCHI, Shigeru)
 山形大学・地域教育文化学部・准教授
 研究者番号： 50287950

研究成果の概要 (和文): フッサールの「理性」概念は、論証的理性をある種の直観的理性へ、すなわち「明証」へと帰着させ、思惟の尺度・根拠への問いを先鋭化することによって、結果的に現象学の「自我論的」転回と「倫理的」転回をもたらした。彼の「原自我」「現象学する自我」の概念と、それが担う「責任性」の概念は、レヴィナスの主体性論と理性論を現象学的に理解するための拠り所となりうる。そこでは、理性を認識の自己陶醉から「覚醒」させるものとしての「倫理的」理性の概念が提起されている。

研究成果の概要 (英文): Husserl's concept of “reason” traces our discursive reason back to a kind of intuitive reason as “evidence”. On the basis of such a “reduction” Husserl sharpens the question about “measure” and “ground” of thinking, which consequently brings about an “egological” and “ethical” turn in phenomenology. Husserl's concept of “primal I” and “phenomenologizing I” as well as that of “responsibility” carried by such an “I” provide a clue to understanding Levinas's thought of “subjectivity” and “reason” in a phenomenological way. The concept of “reason” proposed by Levinas can be interpreted as such an ethical one that signifies “awakening” from self-intoxication of cognitive reason.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 哲学・倫理学

キーワード: 哲学、現象学、フッサール、レヴィナス、理性、倫理、明証、主体性

1. 研究開始当初の背景

現代哲学においては、様々な仕方で近代的理性への批判が行われてきたが、近代的理性

への素朴な信頼が失われたといっても、端的な非合理主義が勝利を収めたわけでもない。現代哲学は、懐疑と批判を経て「理性」概念を新たに蘇らせることを一つの切迫した課

題としているように見える。

このような課題に対して、「現象学」と呼ばれる思考の運動は、独自の仕方での対応を示している。特に、現在まで持続する「現象学運動」を生み出したE・フッサールは、独特の「理性主義」を掲げているが、そこでは、目立たないが実は根本的な「理性」概念の改鑄が行われている。

これまでの現象学研究のなかでは、フッサール現象学の理性主義的契機は、(少数の例外を除けば)彼を依然として規定していた近代哲学の残滓として、もっぱら否定的に扱われることが多かった。しかし、L・ラントグレーベが指摘するように、フッサールの「理性」概念は、詳細に吟味してみると、近代的な理性概念とは根本的に異質な性格を含む。この点を手がかりとするなら、様々な局面において問題性と狭隘さを露呈している近代的理性概念に固執するのではなく、かといってその「反対概念」に、すなわち非理性主義・非合理主義に飛びつくのでもない、第三の立場、「理性」に対する別様の態度の取り方を考えてゆく可能性が開かれうる。

おそらく部分的には同様の関心に導かれて、世界的にレヴィナスへの関心も高まっていた。レヴィナスは、近代的理性に対して明確に批判的な立場をとるが、他方で、近代的理性とは別の仕方、ある種の「尺度」を求める思考を展開している。やはりこの点に、単なる非合理主義に陥らずに、近代理性を批判し、かつその限定された尺度性格を適切に位置づけるための手がかりが含まれている可能性がある。

このように、フッサールとレヴィナスの「理性」概念には、近代的理性概念への批判と、非合理主義への批判という二つの批判が含まれているが、それを支えているのは、ある別なる「理性」概念への洞察とその吟味であると考えられる。このような問題関心が、本研究の出発点を成している。

2. 研究の目的

上記のような問題関心を背景として、本研究が試みたのは、伝統的に哲学・思想において重要な役割を果たしてきた「理性」の概念が、フッサールとレヴィナスの現象学的哲学においてどのような変容を蒙っているのかを明らかにすることであった。そのために本研究では、三つの観点から、両者のテキストの読解とその内容の吟味を試みた。

(1) 「主体性」概念の変容と「理性」

ラディカルな「非自我論的」現象学から出発したフッサールは、後年、「主体性(主観性)」のみならず「自我」の概念をも、現象学的思考の基軸とするに至った。最終的にそ

の「自我」概念は、多くの批判を呼んだ「原自我」(Ur-Ich)の概念に到達したが、この概念は、近代の自我概念を一度徹底的に引き受けることによって、かえってその底を掘り崩し、「自我」と「主体性」のもつ隠れた問題性を露呈させるものであった。この「原自我」概念と、その背景にある「明証」の思想とを吟味することによって、「明証こそが理性である」とするフッサールの理性概念をより明確に特徴づけることを試みた。

レヴィナスもまた、一貫して「主体性」の概念を問い詰めることを意図しており、彼の「他者」概念は「主体性」概念の先鋭化から切り離しては考えられない。「自我か他者か」という二項対立が問題となっているわけではないのである。そして、彼の著作においては、意外にもフッサールの「原自我」概念に通じる主体性概念が見出されるし、また「顔の明証」についても肯定的に語られている。表面的な対立図式を超えて、フッサールからレヴィナスへと通じる隠れた思想的水脈を辿ることも、本研究の目的の一つである。

(2) 「言語」の役割の変容と「理性」

フッサールにおいてすでに、「超越論的言語」の問題は問題として認識されていたが、フッサールはこの点に関して踏み込んだ考察を残していない。しかし、現象学研究によって、その言語的表現との関係は、無視できない問題性を孕んでおり、この点が「理性」概念の変容とも少なからぬ関係をもっていると考えられる。この問題へと意識的に踏み込んでいるのがレヴィナスである。『全体性と無限』における近代哲学批判の試みは、デリダの批判に直面して、とりわけその言語的戦略に関して根本的な見直しを迫られたが、その過程を経て、後期の哲学においては「理性」への問いが「懐疑論」の問題とも関わりつつ浮上してくる。ここでは、「言われたこと」に包摂されることのない「言うこと」の問題が重要になる。この点の検討が本研究の第二の目的を成す。

(3) 理性概念の「倫理的」転換

上記の二つの点を通じて際立ってきているのは、理性概念の「倫理的」転換である。この方向性はすでにフッサールにおいて萌芽的に見られ、近年注目されているように、フッサール現象学を理解する際の重要な要因になる。またレヴィナスは、フッサールを越えてこの方向性を先鋭化し、自覚的に彼の哲学の根本に据える。この点が、秩序とその形成に偏った近代の理性概念に対して批判的に一線を引く際に、レヴィナスの立脚点となる。そしてこの点が、一見すると端的に「反理性的」とも見えるレヴィナスの哲学を、新たな「理性」論の試みとして読み解いてゆく

ための鍵となる。これが単なるテーゼにとどまらないことを提示するためには、先に示した二つの点の綿密な検討が不可欠である。それを背景としてはじめて、レヴィナスにおける変容した「理性」概念の意義が明らかになるであろう。

3. 研究の方法

上記三つの課題を果たすために、本研究は、フッサールおよびレヴィナスの関連文献を綿密に吟味・検討した。その際、既存の解釈を参照することはもちろんだが、必ずしも標準的解釈を自明視せず、両哲学者のテキストそのものをして語らせることを試みた。

検討したテキストは、両哲学者の活動時期全体に渡るが、フッサールにおいては、最近続けて出版された初期の講義（Husserliana [以下 Hua と略記] Bd. XXXVI, Husserliana Materialien [以下 Hua Mat と略記] Bd. III, VII など）、1920年代初頭の講義、とりわけ『哲学入門』（Hua Bd. XXXV）講義を重視した。というのも、初期の講義は現象学的思考の明証論的動機を探るのに格好の材料を提供しているし、20年代の講義は、明証論の更なる発展を辿りつつ、20年代初頭における「倫理的転回」とも呼ぶべきフッサールの思惟の転回を理解するためには、欠かすことのできない資料だからである。さらに、ケルン・フッサール文庫において、明証論、理性論、倫理学関係の未公開草稿を研究した。これにより、公刊著作のみではわかりにくい各概念・思想の発展過程をより具体的に追究した。

レヴィナスに関しては、前期の主著『全体性と無限』、後期の主著『存在するとは別の仕方、あるいは存在の彼方へ』を中心に、両者の前後に書かれた論考を検討し、繰り返し現われるモチーフを分析した。後期に関しては、『観念に到来する神について』を特に重視した。そこには、フッサール論であり、かつ明証論・理性論をも主要なモチーフとした論文「意識から覚醒へ——フッサールから出発して」が収録されているからである。

これらの一次文献を検討しつつ、関連する二次文献を適宜参照・検討した。

また、「理性」概念の現象学的な変容がもつ射程を十分に理解し、見極めるには、現代の思想に見られる「理性」問題への態度の取り方へと、ある程度目を配っておく必要がある。このような観点から、J. デリダ、J.-L. マリオンら現代フランスの思想や、近代哲学との独自の格闘の記録である西田幾多郎や田辺元の思想、さらにアドルノやホワイトヘッドの理性論なども参看した。

4. 研究成果

本研究は、主体性論、言語論、倫理性の解釈という三つの観点からフッサールとレヴィナスの「理性」概念を考察するという目標を立てて出発したが、テキストの検討および事象的な考察を進めるにつれ、最初の二つの論点、すなわち主体性論と言語論を、むしろより根本的な「明証」論から出発して解釈する方が適切であることが明らかになった。

要するに、フッサールの「理性」概念に関しては、「明証」との関わり、「倫理」との関わりの二つが、解釈の最重要点になると考えられる。この見通しを、諸テキストの具体的な検討を通じて確認しながら、さらにこれらの論点が事象分析のなかにどのように生かされているのかを具体的に追った。

第一に「明証」の問題は、自我論・主体性論に深く関わりと同時に、「経験」概念の現象学的改鑄とも切り離せない。これらの論点は、フッサール現象学の哲学的独創性を理解するために不可欠の論点であると同時に、レヴィナスの「理性」概念を理解するための鍵ともなる。

第二に「倫理」の問題は、フッサールの「理性」概念にとって予想した以上に根本的であることが、講義や研究草稿の検討によって明らかになった。この点は、フッサール現象学とレヴィナスの哲学との間のつながりをますます明らかにすると同時に、両者を分かつ点がどこにあるのかを見極める上で、重要な論点を提供している。

これら二点を中心に、研究成果をまとめてみたい。

(1) 「明証」としての理性概念の意義

本研究の成果としてまず挙げられるのは、フッサールが根本的な意味での「理性」を「視ること」(Schauen, Sehen)として、すなわち一種の「直観」として規定していることの意味を、具体的に理解することが可能になった点である。

「視ること」としての直観とは、感性的・身体的に見ることではなく、一般にありありとした否定しようのない洞察を獲得すること、すなわち「明証」を意味する。したがって、「理性とは視ることである」というテーゼは、「理性とは明証である」というテーゼに等しい。これが、フッサールの理性概念の出発点である。

もちろんこの出発点は、恣意的に立てられたのではなく、近代の主導的問いとしての理性への問いを、フッサールなりに換骨奪胎した末に浮上してきたものである。『論理学研究』において、同時代の哲学への徹底した批判を通して、彼自身が「現象学」と呼ぶ新たな哲学的立場・方法が浮かび上がってきたが、『論理学研究』に続く時期において、フッサ

ールはこの立場・方法の自己解釈に苦心する。この時期の講義・草稿のなかで「理性」への問い、思考の尺度にして経験の尺度でもあるものへの問いが徹底して問われる。そこではフッサールが早くから行っていた近世の哲学者たち、すなわち近代的理性の基礎を作った哲学者たちの思考の吟味が、あらためて行われる。とりわけデカルト的な批判的懐疑の徹底が、デカルトに倣いつつデカルトとは異なる道へと踏み出しうる可能性を、フッサールに確信させる契機となる。そこで鍵となったのが、まさしく「明証」の概念だったのである。

1902/03年の『一般的認識論』講義(Hua Mat III)、1906/07年の『論理学と認識論入門』講義(Hua XXIV)、1907年の『現象学の理念』と呼ばれる五講義(Hua II) 1909年の『認識の現象学序説』講義(Hua Mat VII) 1908-13年頃に書かれた「超越論的観念論」をめぐる一連の草稿(Hua XXXVI)などを追っていくと、「理性」への問いが「明証」論へと収斂し、それを立脚点として、「現象学的所与性」とは何か、それを研究する「本質論」としての現象学を方法的に正当化するものは何か、といった問いへの明晰な見通しが、フッサールに開かれてくる過程を、追うことができる。それによって、「現象学とは何か」という問いへの答えが、フッサール自身にとって明確な形をとってくる。その成果を方法の側面から表現するものが「現象学的還元」理論の形成であり、哲学的立場として表現するものが、「超越論的現象学」と呼ばれるものであると考えられる。こうして、初期のフッサールにおいて「理性」への問いが「明証」の問いへと帰着したことこそが、彼の現象学への自己理解を飛躍的に深化させた要因(少なくともその一つ)であると言えるのである。

「明証」としての理性への問いは、その後、『イデー』(1913年)において「理性的現象学」として結実するし、『形式的論理学と超越論的論理学』(1929年)を経て、『デカルト的省察』(1931年) [特に第一、第三省察] や最晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936年)までをも根本的に規定している。これらの著作における「理性主義」的主張は、「理性」概念の内実が十分に理解されていなかったがゆえに、現象学研究において必ずしも肯定的な仕方で受けとめられてこなかったが、「明証」としての理性への問いを取り除くならば、少なくともフッサールにとって「現象学」を「現象学」たらしめる所以は失われてしまうであろう。そしてこの点が、われわれにとっても、現象学を単なる一人称的な内観的記述から区別するために、そしてまた「現象学的」と呼ばれる豊かな分析の領野を誤解による改竄から守るた

めに、重要な意義をもつと考えられる。

(2) 「明証」の根拠性格とその自覚

次に、フッサールの「理性」概念の根底にある「明証」概念の意味内容を、ごく概略的にではあるが示唆しておきたい。

フッサールの「理性」は、「直観」と等置される。これは、論証的な能力としての理性の理解と、鋭く対立する。フッサール自身、この対立を十分意識し、「直視する認識こそが、悟性をまさしく理性へともたらそうとする理性である」(Hua II, 62)と述べている。論証的な能力もまた、論証的な「正しさ」への洞察にもとづいているとすれば、この洞察 = 直観こそが、理性的な「根拠」の行き止まりであり、この「根拠」としての直観こそが、まさしく「明証」と呼ばれるのである。

とはいえ、「明証」とは、単に素朴に何かを「受けとる」ことではない。「明証」は「理性的根拠」の役割を果たしているが、その「根拠」性格を見抜くことは、当の根拠にしたがって推論を行うことよりも、かえって難しいのである。「明証そのものは論証できない」という点を、明証概念の弱さとする限り、人はまだ「明証」を理解する代わりに、「明証」に依拠して確実性を「生きている」にすぎない。『現象学の理念』で指摘されているように、「明証」とは、思惟と論証の根底的尺度であるがゆえに、かえって究極的に「自明なもの」であり(Hua II, 50, 61) 思惟にとってはかえって見透しにくいのである。明証とは、思惟にとっての「明らかさ」そのものであるが、「明らかさ」そのものを、それを外から条件づけるもの(何か或るもの)によって逆に限定してしまうことなく、それそのものとして理解することこそが、「明証」概念によって要求されている。

(3) 「原自我」概念と「倫理」の問題

さて、本研究の目的であったフッサールの「主体性」論、特に「原自我」論について述べておこう。この奇妙な概念がまさに上記のような「明証」概念の一貫した展開の帰結であるということは、拙著『フッサールにおける原自我の問題』(研究業績「図書」(1))の出版を準備する過程で、あらためて確認することができた。

「視ること」、「直観」としての「明証」概念が、フッサールの「理性」の核心であるとされるとき、そこで「誰が視るのか?」という問いが浮上してくる。初期のフッサールは、「視る者」を、本質論としての現象学が捨象することのできる「事實的・経験的な自我」と見なし、「誰のものでもない思惟」(niemandes Denken)という仕方で現象学的思惟を特徴づけようとする。しかし、この特徴づけは、一方で「他者」と「間主観性」の

問題に直面して、他方で「自己関係」ないし「自覚」という性格を本質的に含意する「明証」概念そのものの再吟味と、その中で浮上してくる「純粹自我」の概念によって、廃棄されるに至る。

こうして、「明証」への理解の深化そのものが、いわばフッサールの「自我論的転回」を促す。しかし、これだけでは、まだフッサール現象学全体が「自我論的」と規定されるには至らない。そのような転換は、1920年代の初頭に見られるが、興味深いのは、それとほとんど軌を一にして、哲学・現象学への入門講義のなかに、「倫理」的モチーフが色濃く現われてくるという事実である。このことは、たとえば1922年の「ロンドン講演」や1922/23年の「哲学入門」講義(Hua XXXV)、1923/24年の「第一哲学」講義(Hua VII, VIII)において確認できる。そこでは、最も包括的な「普遍的哲学的理性論」が、「倫理学」と等置されさえるのである(Hua XXXV, 45f.; 拙論(5)参照)。

上記の事実は、フッサール現象学の「自我論的」転回が、ある種の「倫理的転回」に(少なくとも部分的には)依拠しているという可能性を示唆している。この解釈は、後期のフッサールが、「明証」や「理性」の概念と絡めて、思惟の「自己責任」を強調していることから裏書きされうる。このことは、現象学的な認識活動そのもの(この意味での認識的な理性追求そのもの)を動機づけるものとして、いいかえれば、それをさらに包むものとして、ある種の「倫理的審級」の次元が発見されたことを示唆している。この問題が、最晩年において、「現象学する自我」の問題として先鋭化され、「原自我」概念の中核に関わってくるのである。

ごく簡単に言うならば、「理性」追求としての「明証」追求が徹底化されることによって、「根拠」の問題が「現象学的認識とその表現を引き受ける者」へと極まり、そのような主体の「原事実性」の問題として、「原自我」問題が最晩期フッサール現象学の中心問題となってくる。この意味で、「原自我」概念はフッサールの「理性」概念の極限的帰結の一つであるといえる。それは、フッサールの「理性」概念が、近代において自明化した論証的理性概念(フッサールのいえば「悟性」概念)から区別され、その根底へと突き抜けてしまったがゆえに、現象学的「言明」をどう解釈し、その「責任性」をどう考えるかという、根本的な問題を露呈してしまったと言っているのである。

そしてこの点に、レヴィナス的な「倫理」問題への通路が見られる。

(4)レヴィナスにおける「理性」と「倫理」
フッサールの提起した「原自我」の問題は、

思考する自我の極限的な自己理解の問題を提起しており、これがレヴィナスのいう「倫理」に、そして「理性」に関わっているように思われる。フッサールの言う「原自我」に関わる「理性」は、どこまでも「醒めていること」という意味を含んでいるが、レヴィナスは、この点を正確に掴みつつ、「理性」を「覚醒」として記述している。この「覚醒」としての理性は、さらに、われわれを自らの獲得した認識に安住させず、絶えず揺り動かし動揺させ続ける「攪乱」として語り直されてゆく。ここで認識に自足しようとするわれわれを覚醒させ攪乱するのは、レヴィナスの言う「他人」(autrui)であり、「他なるもの」(autre)である。つまり、認識という哲学的理性の活動そのものが、「他なるもの」によって審問され、自己陶醉から責任へと呼び覚まされるのである。

しかも、認識としての理性と、倫理的な呼び覚ましとしての理性とが、単に対立するというわけではない。後期のレヴィナスは、「第三者」の概念、そして「正義」の概念をめぐって、論証的な理性、秩序のなかに包摂していく理性の機能をも、適切な布置のなかに収めようとしているように見える。この点が、レヴィナスの理性論の重要な寄与として、さらに研究されねばならないだろう。

最後に、フッサール晩年に見られる「現象学する自我」の責任性の問題は、レヴィナスにおける「言うこと」と「言われたこと」の問題系に関わると思われるが、「言うこと」が「言われたこと」から徹底して身を引くという仕方では、この両者の分離ばかりが強調されてしまうと、先に述べた論証的理性の適切な布置化の問題が解けなくなってしまう。この点で、具体性の欠如ゆえに空虚な対立図式に落ち込まないためにも、フッサールの「現象学する『私』、そして現象学的に言明する『私』の責任」の問題をここに関わらせることは意味があるように思われる。この点も、さらに考究されねばならないテーマである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) 田口 茂:「異和感が覚起する 理性 間文化性をめぐる現象学的試論」、『現代思想: 現象学の最前線 間文化性という視座』、査読無、Vol. 38-7、2010、86-99.

(2) 田口 茂:「現実的なものの斥けがたさ フッサールの明証概念にもとづく『経験』の再定義」、『フッサール研究』、査読無、第

8号、2010、15-26.

(3) 田口 茂:「自我の近さと暗さ フッサールの『原自我』論と思考することの責任」、『創文』、査読無、524号、2009、23-26.

(4) TAGUCHI, Shigeru: “From Henological Reduction to a Phenomenology of the ‘Name’: A Reinterpretation of Japanese Pure Land Thought”, in: *Frontiers of Japanese Philosophy 4: Facing the 21st Century*, 査読無, 2009, 51-64.

(5) 田口 茂: 「視ることの倫理 フッサールにおける『理性』概念の再定義」、『現代思想: 総特集フッサール・現象学の深化と拡張』、査読無、Vol. 37-16、2009、36-50.

(6) 田口 茂:「懐疑論と理性 フッサールとレヴィナスにおける現象学的思惟の動性」、『哲学論集』(上智大学哲学会編) 査読無、第36号、2007、17-36.

(7) 田口 茂:「現象学における『理性』概念の変容 フッサールとレヴィナスを手がかりにして」、『東北哲学会年報』、査読有、第23号、2007、33-45.

[学会発表](計9件)

(1)TAGUCHI, Shigeru: „Interkulturelle Vernunft. Eine Vorstudie im Anschluss an Husserl“. The 2nd International Symposium of the Research Center for Intercultural Phenomenology, 2010年1月23日、間文化現象学センター、立命館大学

(2) 田口 茂:「死をめぐる尺度 臓器移植問題をめぐって」, 日本現象学・社会科学会, 第26回大会シンポジウム「臓器移植と死」提題, 2009年12月6日、神田外語大学

(3) TAGUCHI, Shigeru: “Beyond Plurality and Singular Origin: The Concept of ‘Primal I’ in Husserl”, Conference: “Self, Ego, Person: Commemorating Husserl’s 150th anniversary”, 2009年10月8日, Center for Subjectivity Research, University of Copenhagen, Copenhagen.

(4) TAGUCHI, Shigeru: “Die Unabweisbarkeit der Wirklichkeit. Phänomenologische Neudefinition der Erfahrung im Anschluss an Husserls Evidenzbegriff”, 第8回フッサール研究会シンポジウム, 2009年3月14日、大学セミナーハウス

(5) TAGUCHI, Shigeru: “Reduction to ‘Trace’:

Phenomenological Interpretation of Japanese Pure Land Buddhism,” The Third Meeting of the Organization of Phenomenological Organizations (OPO III), 2008年12月19日, The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong.

(6) TAGUCHI, Shigeru: “From Henological Reduction to Phenomenology of ‘Name’ – Interpretation of Japanese Pure Land Thought,” International Conference: Envisioning Japanese and Chinese Philosophical Potentials in the 21st Century, 2008年12月14日, The Hong Kong Institute of Education, Hong Kong.

(7) 田口 茂:「『犠牲』の倫理学 死の現象学への序論(脳死臓器移植問題に寄せて)」第3回応用現象学会議、2008年9月23日、東京大学

(8) 田口 茂:「地平の破れ目 フッサールの明証論と原自我論を媒介として」, 平成19年度科学研究費補助金(基盤研究B)「『いのち・からだ・こころ』をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」講演会、2007年12月7日、立命館大学

(9) 田口 茂:「ホワイトヘッド哲学における『思弁』と『理性』」, 日本ホワイトヘッド・プロセス学会第29回全国大会、2007年9月30日、同朋大

[図書](計2件)

(1) 田口 茂:『フッサールにおける原自我の問題 自己の自明な「近さ」への問い』, 法政大学出版社、2010、361頁

(2) 佐藤真理人、田辺秋守、田口 茂、他5名:『フランスの現象学』, 法政大学出版社、2009、5-7、13-57頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 茂 (TAGUCHI, Shigeru)
山形大学・地域教育文化学部・准教授
研究者番号: 50287950